

## Stothard, Charles Alfred

### The monumental effigies of Great Britain; selected from our cathedrals and churches, for the purpose of bringing together, ...

London, J. M<sup>r</sup> Creey(printing) 1817. (文献番号3-186)

Hiler p.817 Lipperheide 992

ストザード著

大英帝国モニュメンタル・エフィジー図録集

中世イギリスの服飾研究に貴重な情報を与えてくれる資料の一つに、貴人のモニュメンタル・エフィジーがある。墓棺の上に横たえられた死者の彫像である。初期の棺には文字や浮彫がほどこされるのみであったが、12世紀末期から、生前の衣装を身に着けた完全な彫像が置かれるようになる。イギリス各地の聖堂や教会に残るエフィジーを綿密に写生し、銅版画に仕上げたのがこの図録集である。作者ストザード(Charles Alfred Stothard 1787-1821)は、エフィジーの正確な描写が高く評価されて、考古学会の歴史画家に推された人物である。誇張のない、簡素で端正な線で描かれた正確な素描は、カニングトンら服装史研究家の著書には欠かせない好資料となっている。本書は1832年つまり作者の死後に出版された。ストザードは、1811年より自作の銅版画12枚からなるモニュメンタル・エフィジー集(The monumental effigies of Great Britain)を発刊し、生存中に第9号まで刊行している。その後未亡人が遺志を受け継ぎ、画帳から版画をおこして12号まで続刊された。その最終号に相当するのが本書であり、1号から11号までの作品に新作を加えて年代順に配列し、さらに未亡人の実兄ケンプ(A. J. Kemp)の序文と解説を加えたものである。

フォリオ版の最初のページは、プランタジネット朝の国王・王妃の彩色エフィジーのプレートで始まり、ウイリアム王の王妃マティルダの棺(文字彫刻)、扉絵、表紙、ケンプの序文とストザードの肖像、そして12世紀から15世紀にいたる144枚のプレートとその解説が続き、おわりに図録索引が付く。エフィジーはほとんどが正面像、つまり真上から見た像と、側面像の2枚のプレートに描かれ、時にはディテールや紋章などが彩色されて描き加えられている。初期の像はまだ様式化されていないが、13世紀後期からは、頭の下にクッションや兜、足元に獅子や犬を置き、合掌して横たわる姿が一般的になる。貴人はほとんどが武装のまま彫られており、したがって12世紀以後の鎖帷子くさりかたびらとその上に着たサーコートの移り変わり、プレート鎧への移行と防具の変化などを的確にたどることができる。また貴婦人像では、衣裳の形や重なりや装飾はもとより、趣向をこらした髪型やかぶりものは、側面像やディテールの拡大図からよく理解することができる。像の表面から見えない部分についてもストザードは慎重な考証を怠らず、鎧や衣裳に関する豊富な知識を下敷きに、正確な描写を心がけたことが、ケンプの序文に述べられている。

第1号のエフィジー集を発行した際に、ストザードは次のようなことばを載せている。「重

要かつ興味深き国王・貴人のエフィジーは、出版界において軽視されるという残念な状況にある。大聖堂や教会に納められた死者の像の芸術作品を、時間の浸食から守る目的でこの作業にとりかかった（中略）この大作業に引かれたのは次のことに気が興味が高まったからである。一つはエフィジーが他のどの資料よりもイギリスの各時代のコスチュームをよく表現している事である。彩色写本から知識を得ることはできるが、画像が小さく粗雑なところがあり、細部や装飾は明確さに欠ける。もう一つは、エフィジーがヘンリー8世の時代にいたるまでの英国の歴史であり伝記でもあり、シェークスピア劇の時代考証にも関わっている点である。（序文、p.18）」英国諸侯の歴史であるのみならず、風俗服装の歴史でもあると確信し、エフィジーを正確に記録して後世に残そうと考えたストザードの熱意をうかがい知ることができる。

彼は考古学会の依頼で、1816年から数年に渡ってバイユーのタピストリーの素描のためにノルマンディーを訪れている。その際にフォントブローの教会の地下室で、フランス革命中の破壊を免れたプランタジネットの国王・王妃のエフィジーを発見している。またバイユーのタピストリーの製作年代について、従来の12世紀説を否定し、コスチュームから判断してウイリアムのノルマン征服のその年に製作されたことを論証して考古学会の特別会員となっている。新妻を伴って再度ノルマンディーを訪れた際に、彼女が実母に宛てた手紙が書簡集として1820年に刊行され、また1823年には回想録が夫人の手で出版されている。本書序文には両書からの引用が多く、ストザードの優れた観察眼と深い考察力をよく伝えている。彼は、ノルマンディーでの素描旅行中に教会の梯子から転落するという事故に会い、若くしてこの世を去っている。ついでながら、未亡人は後に再婚して小説家となり（A. E. Bray）、いくつかの作品を残している。

ストザードの豊かな考古学の知識と、卓越した素描力から生まれたこの図録集は、ページを

めくるたびに新たな知識と発見を読者に与えてくれる、興味つきない書物の一つである。

図は、伯爵階級のコスチュームの代表例である。夫人の珍しい髪型は、幅が22インチもある。（辻）

